

広報福島

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 丹治 秀 樹
編集 同 広 報 部

【巻 頭 言】

教員のやりがい

福島市立福島第一小学校長 横山 貴英

福島大学の教員を志願する4年生に話をする機会があり、「教員のやりがい」について身近な先生方にも意見をいただき、伝えることができた。

- ・子どもの「わかった」「できた」と輝く笑顔を見て、その成長や喜びにかかわれたと思うこと
- ・自分が学んだ分、子どもの成長が感じられること
- ・困っている子どもにも「生きる力」と「夢」を与えることができる仕事であること 等

寄せられた多くの「やりがい」は、それぞれの経験からの思いが込められており、きっと「未来の先生」にも響いてくれたのではないかと思います。

その中に教職7年目の若い先生から「終わりがないこと」という回答があった。「終わりのない仕事」には多忙感が感じられ、やりがいは反対なのではと思ったが、よく聞くと、「子どもたちの成長や理想の学級にはゴールがなく、目標が達成できても、さらにもっと目指す道が開ける。『もっとできる』それがやりがい」ということで、感心した。可能性の塊である子どもたちの成長にかかわり続けることができる教員の仕事ならではだ。「これでいい」ではなく「できる限り」とどこまでも高めていくことができる喜びは、まさに大きな「やりがい」であろう。

かつて学級担任時代、3月に「もっと力をつけてあげられたのではないかと悔やんだことがあった。でも、この若い先生だったら「もっとやれることがあるぞ」「自分も学ぼう」「まだまだ成長させることができるぞ」という前向きな意欲をもって進むのではないだろうか。うまくいくことばかりではないし、反省も大事だが、これはまさに教員ならではのやりがいの一つに違いない。

教員不足、志願者減少という大きな課題を前に、教員一人一人が改めて「やりがい」を思い描き、日々のそれぞれの姿で発信していくことは大切だと思う。校長としても皆に「教員のやりがい」を実感できるような働きかけを行っていきたい。

一人一人の違いを

福島市立福島第二小学校長 伏見 珠美

この夏は、会津地方、特に喜多方市周辺では大雨により大きな被害が出て、生活に支障が出ていると聞く。福島市でも今年3月に発生した福島県沖地震により、学校生活に大きな影響があった。しかし、その時の困り感は記憶の隅に追いやられてしまっており、改めて当たり前で生活できることへの感謝の思いを新たにしました。

さて、8月6日、広島の77回目の広島原爆記念式典で、二人の小学6年生による子ども代表挨拶の中で次のように述べていたのが心に残った。

「自分が優位に立ち自分の考えを押し通すこと、それは強さとは言えません。本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとすることです。本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。」

多様性という言葉が言われているが、本校でも、「違いを認め相手を受け入れること」「思いやりの心をもつこと」を大切にしたいと考えている。しかし、大人でも難しいことを子どもたちにどのように具体的に伝えればよいのか。そんな中、1学期に本校の特別支援コーディネーターから全校生に「一人一人が安心して生き生きと生活できる第二小学校に」という話をする機会をもった。目標を達成するためのやり方が一人一人違うように、得手不得手もそれぞれで自分と友達と同じじゃない、でもみんなが頑張っている、ということに関わりや経験を通して分かり合い助け合うようにしようという内容だった。

「同質性を求めれば求めるほど、子どもたちの小さな差異が浮き彫りになる」と言われている。自分と友達は違う存在で、みんなが違うからこそ分かり合うことが大切だということ、分かり合うためにどうすればいいのかを考え実感を通して学んでいくことが、小学生の今だからこそ必要だと感じた夏の日であった。

【 今 想うこと 】

昔（むがーし）あったんだどー 今，ねえんだど

福島市教育委員会教育長 古関 明善

津軽弁を駆使し、「13日の金曜日」にふるさと青森市の**だびよん劇場**でライブを行っていたあの伊那 かつぺいさんの大ファンである。現在75歳。身近な出来事を彼独特の視点で詩を書き、音楽を交えた軽妙な語りをする多才なローカルタレントである。何度か生のトークライブも見た。「にぎやかなひとりごと」「消ゴムでかいた落書き」などコンサートのテープも購入し、テープががすり切れるまで聞いたものだ。その中に、「昔話」という作品がある。本文のタイトルに示した言葉だが何ともおかしく妙に納得できる一節だ。

思い出にふけるつもりはないが、少し昔話をしたい。今思うと、40年前の教育実習や初任校での厳しさが現場で役立ったことがとにかく多かった。当時の先生方の口癖は今でも忘れられない。特に記憶に残っている言葉を書き出してみると、
《心構え的な言葉》

「子どもとの出会いを大切にしろ」

「子どもは教師を待っている」

「一日の始まりは、正しい子どもの呼名から」

「遊びをおしえられたら一人前」

「教室は間違える場所である」

「メモを取れ」

《授業に関する言葉》

「授業は計画的に行うドラマだ」

「指導案のない授業は、海図を見ずに港を出る船と同じだ」

「わかりやすい授業は永遠の課題」

「子どもの変容の実態を把握して指名せよ」

「うるさく言われた黒板の使い方、板書の基礎基本、チョークの使い方」

「机間指導はコミュニケーション回路、机間巡視とは違う」

「教科書『を』教えず、教科書『で』教える」

「授業は紙一重 しかし、恐るべし紙一重の差あなどりがたし」

授業は、紙一重である。教えることも同じ、子どもも同じ、方法だってそんなにかけ離れたものがあるわけではない。しかし、結果として、すごい授業もある。紙一重ではあるが、この紙一重の差が恐るべし。その意味で、授業はダイヤモンドのようである。ちょっとしたことで、ほんのわずかな差で、価値がぐぐっと変わる。授業を求める営みは、この紙一重の差に気付く感性、たった紙1枚の厚さを乗り越えようとする情熱に支えられている。

「授業に行きづまっても心配するな！教材にかえれば、道は開ける」

授業に行きづまったとき、枝葉末節で悩むな。技術で悩むな。授業に行きづまったときこそ、教材に返れ。もう一度教材と友達になれ。教材のおもしろさを、もう一度、新鮮な感性で見つけ出せ。教材の不思議さを、もう一度問い直せ。

昔の職員室では、教育談義が華やかだったという。内容は、今日の行事、職員の噂話、クラスでの失敗談、子どもの態度、校長の悪口、将来の設計、自慢話等。しかし、そこに若手の教員が入ってくると、とたんに説教が始まり「何だ今日の授業は！勉強不足だぞ」と指導を受けることが多かったそうだ。その厳しい指導の後には、学校要覧にはない地域や子どもの実態、過去に起きた事件と始末の仕方、先輩の失敗談からの忠告など、役立つ話題も多かったという。新任の教員は、学年会などで、具体的にぎっちり指導を受けたことと思う。今の時代にはあわないというお叱りもいただきそうだ。しかし、残したいものはしっかり残し、つないでいく。「昔はあったんだどー」と思い出話をしているだけでは、教師文化は過去の遺物になり、やがては葬り去られてしまうのではないか。不易を生かした新しい不易として残していきたいものだが、いかがだろうか。

さて、あなたの学校の職員室は……。

思いを引き継ぐ

福島市立福島第三小学校長 齋藤 雅敏

「愛・誠・勇」は、明治40年に作成された本校の校訓であり、この言葉は、ことあるごとに校内で用いられています。「愛誠勇マン」なるヒーローも存在し、時には6年生が、時には校長が変身し、ポーズを決めて子ども達にやさしく愛の精神や誠実さを説きます。先生方は、おそろいの「愛誠勇シャツ」を着て運動会や宿泊学習の指導に当たります。「愛の庭」では子ども達の美しい歌声が響き、「誠の庭」では子どもが真剣な眼差しで桜の木を描いており、「勇の庭」では上級生と下級生が仲良く遊んでいます。「愛・誠・勇」の名称を冠した学校行事も数多くあり、校歌の歌詞にも「愛・誠・勇」の精神が込められています。教育目標以上に学校経営の基盤となっている言葉だといっても過言ではありません。

また、本校では、平成11年度に文部科学省指定研究開発学校として、総合的な学習の時間の研究をスタートして以来24年間、「やわらかな感性で、しなやかに学びあう子どもの育成」の同テーマのもと、主体的に学ぶ子どもの育成を図るための教育研究及び授業公開を行っています。

どの学校もそうでしょうが、本校の場合は、この校訓や教育研究に、これまで勤務された方々や地域の人々の思いを感じることができます。その思いが学校の校風や雰囲気を作ってきたのでしょう。私は、その長い歩みの中の現在を受け持ち、未来へつないでいく役割を担っています。この学校が今まで築き上げてきたことを尊重した上で、充実・発展させていきたいと考えています。

コロナ禍の現在、時代が求めていることも含め教育にかかわる課題は山積しておりますが、私達教師は、知恵を出し合い、子ども達のよりよい成長・自立のために力を合わせて取り組んでいかなければなりません。先輩諸氏の思いを踏まえながら、現在を担う私は何をすべきかを考えて日々学校経営に取り組んでいるところです。

「理不尽に勝つ」(著：平尾誠二)
より学ぶ

福島市立笹谷小学校長 佐藤 和暁

平尾誠二氏は、ラグーマンでありその経歴、戦歴は実に華々しい。そして、そのリーダーシップも類まれである。彼は昭和38年1月生まれ、即ち私と同学年なのであるが、残念なことに既に故人である。(興味のある方は調べて下さい。)

大学時代、部活動で主将を決める話し合いの場で「まず和暁の線は無しだな」と言われたほど、組織のリーダーとしての資質に乏しかった私であったが、幸いにも校長になることが出来たので、この機会にリーダーシップ、学校経営について本からヒントを得てみようと考えた。本屋で著名な校長先生方が書かれた本を手にとってみたりしたが、そこでふと目についた本がそれである。何せ私にはタイトルがイケていた。その内容はラグビーを中心としたリーダーシップの在り方や物事の見方、考え方が書き記されており、私にとってすごく納得させられる内容であったし、それは学校経営にも十分に生かすことが出来ると思われた。平尾氏については、この本に出会う前から、私にとってはすごく気になる存在であったので、他にも彼が関連する本を何冊か読んでみた。これがまた私の中にスッと入ってくる。私はラグビーに詳しい訳ではない。大学の授業で行ったことしかないが、内容は実によく理解できた。リーダーシップとは実に奥が深いのである。

学校を動かすこと、人を動かすことは実に難しいと思う。勿論、本で読んだことを意識してはいるのだが、未だに日々の出来事にあたふたし、思うような学校経営に至っていない自分に気付かされる。早く平尾氏のようなリーダーシップが発揮出来るようになりたいものだが、間もなくその立場でもなくなってしまう。

前任校で教頭から「校長先生って理不尽に立ち向かって行ってますよね。」と言われたことがあった。立ち向かっているかもしれないが、残念ながら「勝つ」てはいないんだよね。困ったことに。

あいさつであいさつ

福島市立月輪小学校長 蓬田 孝夫

「おはようございます」「さようなら」子どもたちと毎日、校内や通学路で明るく元気にさわやかにあいさつを交わすことを心がけています。

武道の世界では「礼に始まり礼に終わる」という礼儀作法が重要視されています。これを、日常生活に置き換えると、「あいさつで始まりあいさつで終わる」ということになるのでしょうか。学校生活においても然り、いかなる場面においてもあいさつがコミュニケーションの第一歩となると思います。気持ちのよいあいさつを通して円滑な人間関係を築くことが大切だと考えています。

本校では、「あいさつ」「つたえる」「ねばり強く」の頭文字から「月輪小に**あったね**」というスローガンを掲げています。日々の指導、学び、学校生活全般を通して、「進んで明るいあいさつをし、自分の考えや思いを相手に分かりやすくつたえ、何事にもねばり強く取り組むことができる子ども」の育成を目指しているところです。先生方は、「あったね」について、月毎に取組を振り返るとともに、翌月の具体的な取組について提案し、共通理解のもと実践にあたっています。

特に、あいさつについては、ある日の新聞の4コマ漫画で読んだ、気持ちのよいあいさつの極意「**あいさつであいさつ**」(あかるく いつでも さきにつなぐ笑顔の頭文字で**あいさつ**)を先生方、子どもたちに紹介し、みんなで実践を継続しているところです。最初は小さな一歩かもしれませんが、「あいさつであいさつ」を地道に継続していくことで、笑顔の輪を着実に広げ、世界中から争いごとをなくし、みんながお互いを理解し合い、協力し合って気持ちのよい生活ができるようにしていきたいとの大きな夢を抱いています。

夢の実現のために、まずは自分から。今日も明日も「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」と明るく、先を心がけていきます。

小規模校の 効果の最大化を目指して

福島市立佐原小学校長 星 文行

本校は、児童数25名、学級数は完全複式の3学級の小規模校である。縦割りの活動も多く、上学年の児童が下学年の児童の面倒を進んで見る意識が受け継がれており、ほのぼのとした家庭的な雰囲気を感じられる。そのような中、児童は明るく素直な様子で生活している一方、自分自身で考え判断する経験が少ないためか、自分に自信が持てず、自己肯定感が低いように感じられる。そこで本校では、少人数や複式の学習での効果を最大限に生かし、個別最適な学びや協働的な学びの実現を通し、組織的に児童の資質・能力の向上を目指している。

まずは、少人数での指導を生かし、全職員でそれぞれの立場から児童の実態や興味・関心をきめ細かく把握し、共通理解のもと、担任を中心として個に応じた指導を行っている。それらの効果や状況が、職員室の中で自然に情報として出てくるような雰囲気づくりを教頭とともにやっている。

次に、複式学級を逆手に取り、児童が主体となって協働する場の設定を意識して行っている。今年度は「学習リーダーの手引き」を見直し、児童の考えがより主体的に表現できるようにすることと、「聞く力」を明確にし育成することを現職教育の中で進めている。

効果は見えにくいものではあるが、児童会活動の中で高学年の児童が自分の考えを提案し、楽しそうに活動している姿が見られたり、児童の生き生きと活動する様子を、担任が職員室で嬉しそうに話す声を聞いたりすることで、少しずつではあるが良い方向に進んでいると実感することができる。

今後も、児童はもちろん、教職員からも笑顔が見られ、それぞれの成長が感じられるような学校経営を目指していきたい。

東北連小研究協議会に 参加して

福島市立飯坂小学校長 逸見 健二

東北連小研究協議会が、盛岡市において3年ぶりに参集型で開催された。シンポジウムや分科会においては、刺激を受けることが多く、校長の指導性、教員の資質・指導力向上に直結する実践等について学ぶ良い機会となった。また、6年前の岩手大会にも参加したが、「東北は一つ」、「すべては子どもたちのために」の思いを改めて感じる事ができた。

分科会における東北六県の校長先生方との熱心な研究協議は大変有意義であった。「自立と社会参画を図る教育の推進(特別支援教育, キャリア教育)」のテーマで、各県の現状や課題等について協議し、特別支援教育については、早期支援・早期対応の重要性、支援員の増員配置の必要性、管理職や特別支援学級担任をはじめ、すべての教職員の専門性の向上など、校長としてやるべき課題や方向性について共有できた。また、個別最適な学び・協働的な学びを具現化するためには、個に応じた指導の充実を一層図ることは勿論、授業のユニバーサルデザイン化(授業のUD化)を推進する必要性について、議論を深める事ができた。分科会で得たことは、今後、自校の学校運営及び校務推進に生かすとともに、方部校長会でも共有し、実践を深めていきたいと考える。

分科会では、若手教員や講師等の学級経営力、指導力・授業力を高めることが、校長としての喫緊の課題であることも話題に上がった。教員のやる気にいかに火を点けるか、校長の指導性をいかに発揮するかが重要であると改めて感じた。

これからの校長職として残り1年半、先輩の校長先生方が常々話していた「後進の育成こそ校長の最大の使命」を胸に刻み、教員の育成に全力で取り組んでいきたいと考える。

また、来たるべき令和5年度の新生飯坂小の開校、創立150周年に向けて、組織を挙げて力強く前進していきたい。

軸足をもった学校経営と 校長の在り方

福島市立下川崎小学校長 大内 伸一

「教育は振り子のように」とよく言われる。私はその振り子にこれまで何度か振り回されて自分のスタイルを変えてきた。新しい教育の在り方が打ち出されるたび、「あー、今度はこっちか・・・」と辟易しながらも時代の流れに乗ろうとしてきた。教育って流行りでやっていいものなのかという内なる疑問には蓋をして。

先の中教審答申「令和の日本型学校教育」の中で個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指すことがこれから求められる教育であることが提案された。私は今度はどちらの方向に進むのかとこの答申に注目した。そんな折、「小学校時報 5」(令和4年No.849)を読んだ。そこで、私は京都大学大学院教育学研究科准教授 石井英真氏の玉稿にふれた。授業についての論説だが、これほど深く・広く授業を捉え、自身の考えを明確に言語化できることに驚き、尊敬の念がわいた。この授業観は振り子を超越した不易のものだと思った。中でも次の一節に光明をえた思いがした。

～文字通り「AからBへ」と、否定的にAに光を当てるのではなく、Bに軸足を移したときにどうAがとらえ直されるのかを問うことが重要である。教えること、集団で学ぶことを含む「授業」が問われているのである。

「授業」を「学校経営」に読み替えてみても、同様に思考できるはずである。教育の振り子論に対して、「AからBへ」と否定的にAを考える二項対立図式の思考ではなく、Bに軸足を移したときにAを捉え直すという発想が参考になった。校長にそういう発想があれば、学校は振り子のように振られて翻弄されることなく、バランス感覚を保ちながら変化に対応できるのではと考えた。

生き物は心を動かす

福島市立三河台小学校長 山本 巖

先日、家の花壇を手入れしていると地面に落ちていたタンポポの綿毛が奇妙に動いていた。風は吹いていない。不思議に思って近づいてみると、1匹のアリが体長の数倍もある大きな綿毛を必死に(多分そう感じているだろう)運んでいた。その不思議さ、健気さ、大変さを想像しているうちに時間のたつのも忘れて見入ってしまった。

学校には、花壇や庭があったり、ビオトープまで整備してあったりする。

ある朝、登校指導をしていると、正門から昇降口に行く途中でA君の足が止まってしまった。どうやら、教室に行きたくないようだ。体調のことを聞いたり、朝ごはんのことを尋ねたりしたが、硬い表情のまま何の反応もなかった。そこで、池にカエルが数匹いたことを思い出し「池にカエルがいたよ。見に行こうか!」と声をかけてみた。すると、A君の止まった足が池の方に向かって少しずつ動き出したのだ。池まで来るとA君は必死にカエルの姿を探し、見つけるとジーッと見つめていた。しばらくすると、その表情はさっきまでと違って柔らかくなっていった。「何匹いた?」「3匹」と短い会話をしつつ「今日の給食は何かな?」と言いながら手を引いてみた。A君は抵抗することなく、ゆっくり昇降口に向かって行った。

これまで、生き物に触れると心を開いてくれる子どもたちを何人も見てきた。生き物は人の心を引き付け、素直にしてくれる何かをもっている。それはいったい何なのだろう。

本校のビオトープ。休み時間になるとメダカを捕まえたりイトトンボを追いかけたりする子どもたちの姿で溢れている。中にはただジーッと生き物の動きを見ているだけの子どももいる。一見、何もしていないように見えるが、きっとたくさんの会話をしているのだろう。聞いてみたくなった。

50代からの趣味

福島市立平野小学校長 渡邊 裕樹

私は無趣味な人間である。これまでの自分を振り返ったときにも、特に思い浮かぶものがない。それでも、PTAの広報など、趣味について聞かれることは多い。そんなとき、「ゴルフを始めました」と答えることにしている。これは半分だけ事実である。

平成29年、校長に昇任して県中地区に赴任した。辞令交付の後、赴任先の教育委員会に伺い、教育長さんにご挨拶をさせていただいた。自己紹介をし、辞令をお見せした直後の教育長さんの一言目に驚いたことを覚えている。

「あんたは、ゴルフやんのかい?」

「いえ、やりません。」と答えた私に、教育長さんは笑いながらこう言った。

「まだやってません、だろ。」

そこから、いろいろな方にお古のクラブをいただき、1カ月後には、コースに立っていた。ゴルフというよりは、山歩きだった。

地区の校長先生方とゴルフをしたときには、日頃とは違う姿を見たり、話を聞いたりすることができた。勤続30年の際には、皆さんからパターをいただいた。職員12名の学校で、8名でコースを回ったこともあった。学校では見られない一面を見て驚いたものだ。

そしてなにより、緑のなかを歩くのは気持ちがいい。芝生の上はあまり歩けなかったが、心が落ち着くひとときであった。妻と何度か、ゴルフ場に隣接した施設に行ったこともあるが、風景だけを楽しんで帰ってきた。

福島地区に戻ってきて4年目になるが、その間は一度もゴルフをしていない。

無趣味な私ではあるが、また緑のなかを歩くために、打ちっぱなしからやり直してみようかなと思う今日この頃である。

編集後記

お寄せいただきました玉稿より、目の前の子ども達への充実した教育活動とこれからの学校経営のヒントを学ばせていただきました。大変お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

福島市立水原小学校長 菅野 靖